

配達員は通いの届け先で猫の獣人に種 を注がれて帰る

R18

2026
・
9
・
3

目次

第1話

第2話

第1話

二枚目の伝票を胸ポケットへ押し込んだ。置き配の写真はもう送っている。玄関先に人は出なかった。袋の口が風で開き、伝票の端が指に当たる。受領印の代わりに置いた写真の時刻が、端末の履歴に残っている。

水曜の昼。時計は十二時十七分。陸は軽バンに戻り、端末で三枚目を開いた。宛名は榊。番地は住宅街の突き当たりだ。履歴は空欄のまま点いている。この番地は初めてだ。

ナビは最短を出す。陸は一方通行を避けて一本外へ回った。信号を二つ越える。エンジンをかけて十分も走らない。縁石に寄せ、ハザードを点けた。前の車が残した空きに、箱の幅だけ入る。サイドミラーが生垣に触れない位置まで切り返す。荷台を開けると熱気が顔に来る。奥から箱を引き出す。両腕に来る重さだ。宛名シールが端から浮いていた。指で一度押さえる。伝票番号を端末に打つ。電池は半分を切っている。

次件は拠点の戻り便だ。空カゴを二時までに戻す。ここに座る時間は組まれていない。ルート表の余白に、午前指定なしと書いてある。指定がない日は早いほうが楽だ。

歩道は狭い。箱の角が生垣に当たりそうになる。家番号を目で追った。植木の陰で二件飛び、白い壁の家が出る。駐車スペースに車はない。表札は小さい。櫛。インターホンの下に、セールスお断りのシールが貼ってある。ボタンは箱の角より低い。膝で箱を支えて押した。スピーカーが一度鳴る。返事はない。内側で鍵が回る。ドアが開く。陸はたたきに足をかけない。箱を胸の前で支えたまま、段の外で止まった。

短い毛の耳が、額の上で二本、外を向いて立っていた。
動揺した。

尾も見えた。ふくらはぎの高さで、ドア枠の陰に落ちている。顔は人だ。三十前後に見える。室内着の裾が敷居で止まっている。客だ。

「配達です。榊様でよろしいですか」

「ああ、榊だ。その箱だな」

「はい、伝票どおりです。番号はこちらになります」

端末の画面を箱の上で向けた。榊は数字を一度見て、顎を動かした。箱を前へ出す。相手の手は底を受け、指は陸の手首まで来ない。段ボールが間に入る。その位置で止まった。

助かった。

「受領をお願いします」

ハンディを胸の高さまで上げた。氏名欄が空いている。画面が昼の光を返す。タップが鈍い。陸は画面を一度袖で拭いて出し直した。予備のペンが胸ポケットで当たる。使わない。

櫛の視線が、制服の名札へ落ちた。

「……陸か」

「はい、担当の陸です」

「毎日の便か？」

「いえ、週に何本かのルートです。今日は私が担当でして」

画面に一字ずつ入る。尾がドア枠に当たった。櫛は枠から半歩下がる。扉は全開にしない。土間の靴は一足だけ見える。サイズは大きい。

い。靴の横に、開いていない郵便受けの蓋がある。

「置き場所のご指定はありますか？」

「そこでいい。上げなくていい」

箱をたたきに置いた。段ボールの底がタイルに当たる。置き写真を撮る。端末が保存音を出す。呼び込みもない。

面倒な客ではない。ありがたい。

印の欄を指で示した。櫛は端末の画面を見て、下端を親指でなぞった。線が途中で切れる。もう一度なぞる。受領の音が短く鳴る。ハンディが一度震える。

「印鑑はお持ちですか？」

「その画面で足りるだろう」

「中身のご確認はされますか？」

「後でする。お前、次があるんだろ」

端末の端に次件の時刻が出ている。同じ水曜の午後。拠点のドックは混む。遅れば席を取られる。地図は十二分と出している。

「はい。二時の戻り便がありますので」

「行け」

陸はそれが気に入った。

伝票を二つに折って胸ポケットへ入れた。ハンディをベルトのケースに戻す。その途中で、耳が一度だけ動く。通りのアイドリングに合

わせて動いた。

「失礼します」

「ああ」

陸が一段下がると、扉が閉まった。鍵はすぐ内側でかかる。足音は追ってこない。ポストにチラシが一枚挟まったまま揺れた。

玄関先の段を下り、歩道に出た。箱の重さが腕の内側に残っている。隣家の排水が昼の光で光る。そこらは見ない。軽バンのハザードがまだ点いている。背中の制服が張り付いている。鍵をポケットから出すとき、指が滑った。一度握り直して運転席のドアを開ける。

荷台のシャッターを閉めた。運転席に戻るとシートが熱い。ハンドルは日向を浴びて持てない。ハンカチを当てて握る。エンジンをかけて、完了を端末に送る。画面が届済に変わる。伝票の四枚目をハンドルの上に置く。クリップが外れて、紙が膝に落ちた。拾って挟み直す。エアコンは効きが遅い。

初顔は覚えた。手帳には書かない。端末の備考も空のままにする。交差点の手前で信号が赤になった。陸はブレーキを踏んだ。喉が乾いている。右の角に自販機がある。この赤のうちに済む。

自販機のパネルが熱い。百円を入れて水を一本出した。缶が落ちる音が短い。キャップを外して、制服のまま飲む。箱の角で赤くなった

指の腹が、缶の面に当たる。冷たい。飲み切らずにホルダーへ立てる。残りの水が缶の中で動く。信号はまだ赤い。

槲の声が残っている。行け、の一語だ。

安心した。名を呼ばれたことが、少し引っかった。

信号が青に変わる。四枚目の住所を一度確認した。数字を声に出さない。目で追うだけだ。戻り便は二時。缶の水がホルダーの中で揺れる。制服の名札がベルトに当たった。

左へ折れて大きい通りへ出た。トラックが前を塞いで、アクセルを踏めない。二台分遅れて隙間が開く。突き当たりの家はミラーに一瞬入って、すぐ消えた。四枚目は午後の便だ。先に拠点へ空カゴを戻

す。陸はアクセルを踏み、ドックへ向かった。今日はここに戻らない。荷台は空のままだ。ハザードはもう切っている。

第2話

空カゴをドックの列へ滑らせた。水曜の夕だ。陸の制服は乾いていない。

時計は十七時二十分。戻り便のカゴは二時に間に合わせてある。午後の件も打ち終わった。拠点のシャッターはまだ半分開いている。フオークの音が奥で続く。床にテープの切れ端が貼りついている。靴底が一度だけ引つかかる。

伝票の束が胸ポケットで厚い。三枚目の角が指に当たる。宛名は榊だ。昼に渡した件だ。ハンディの履歴は届済だ。備考は空のまま残っている。

戻り表に署名欄がある。陸は名前を書く。時刻は十七時二十二分。班長印は後だ。ペンのインクが途中で薄れる。一度なぞる。隣の列に午後の件数がある。数字は十二。自分の担当は四件だ。

空カゴを七つ数えた。表の欄は七だ。合っている。マジックでレ点を入れる。蓋の欠けたカゴは端へ出す。戸田が後で潰す分だ。ラベルの剥がし残しが枠に付いている。爪で一度剥がす。粘着が指に残る。

事務所のカウンターへ向かった。蛍光灯が一つ飛ぶ。常連カードの箱が端に置いてある。戸田がハンディを叩いている。班長だ。四十は過ぎてゐる。名札の字が薄れている。後ろの棚に空の伝票箱が三段積んである。一番上の箱が斜めだ。陸は直さない。今の仕事ではない。

「陸。未記入が残ってるぞ」

「戻りの分は入れましたけど」

「突き当たりの家の件だ。備考の履歴が空のままだ」

画面を向けられる。昼の番地だ。届済の印は付いている。備考だけ白い。

陸は端末を受け取った。キーが夕方の脂で滑る。袖で一度拭く。

「初回だったので。特に指定ありませんでした」

「初回こそ空で返すな。次の奴が困るだろうが」

戸田はカード箱を一つ引く。白紙が出る。裏に拠点の印がある。ペンを置く。インクは青い。キャップが転がる。陸が止める。

「名前書いとけ。週何本入るか、置き場所もだ」

面倒だ。昼は手帳にも備考にも残していない。残す仕事が夕に回ってきた。

陸はカードの氏名欄へ榊と書いた。字が少し潰れる。書き直さない。頻度の欄は週に何本か、とだけ入れる。住所は端末から写す。番地の数字を二度見る。

「置き場所は」

戸田がカードの下段を叩く。空欄が残っている。

「玄関止めです。中には上がるなど」

「客がそう言ったのか？」

「ええ。上げなくていい、と。あとは、行け、とも」

「随分と手間の省ける常連だな。その二言なら間違いない」

カードを箱のサ行へ立てる。隣の札が倒れる。陸が直す。戸田は直さない。サの列は薄い。櫛の札だけ新しい。箱の奥へ一枚ずらす。戸田は見ない。

安心した。

三好が奥のロッカーから出てきた。同じ便の担当だ。帽子を手に持っている。シフトの終了印が端末に残っている。

「突き当たりの家、終わった？あの辺、置き配で済む家多いだろ」

「いや、手渡しでした」

「へえ、家主出たのか」

「出ましたよ。でも、上がれとは言われませんでした」

三好は帽子を被り直す。自動販売機の方角を見る。裏の掲示に翌日の集合時刻が出ている。六時半だ。

「一本買っていくか？」

「いえ、明日の朝便があるので上がります」

「固いな。……おつ、金曜の件、またお前か」

「金曜ですね」

三好は百円を入れてコーヒーを出す。缶が落ちる。陸は受け取らない。手は伝票の束に戻す。三好は一口飲んで、缶を窓枠に置く。輪の跡が付く。

戸田が翌朝の束をカウンターへ落とす。輪ゴムが切れて、紙が開く。陸は床に落ちた一枚を拾った。番地を目で追う。突き当たりは入っていない。金曜指定だ。インクが薄い。蛍光灯の下で一度傾ける。

「桝は金曜だな」

戸田が言う。画面を一度だけ見せる。週の欄に金、と短い。陸は口に出さない。

「予備のハンディ、充電置いといてくれ」

「はい、置きます」

充電器の列は窓際だ。赤いランプが三つ点いている。陸の端末を一番端へ差す。ケーブルが短い。ケースから出して置く。画面が黒いまま一瞬残る。届済の一覧が消える。

流しで手を洗った。石鹸は切れかけだ。水が冷たい。ペーパータオルは箱の底だ。二枚取る。

ロッカーを開けた。私服の襟がフックにかかっている。今日は着替える。背中がまだ湿っている。

シャツを着る。名札を外してケースへ入れた。胸の位置が軽くなる。ズボンは現場のままにする。靴を履き替える。かかとがコンクリートに当たる。

タイムカードを挿す。機械が短い音を出す。十七時四十八分。残業欄は空だ。横の黒板に、欠便なしと白チョークで書いてある。

戸田がカード箱の蓋を閉めた。ゴムで止める。箱の側面に油性の字で常連と書いてある。端がかすれている。

「常連は名前を先に覚えるんだ。顔は後からいい」

門のセンサーが鳴る。夕の便のトラックが一台入る。陸の担当ではない。横を歩く。ガードマンが顎だけで通す。

駐輪場の端に自分の自転車がある。サドルが熱い。ロックの番号を回す。一度間違える。開き直す。カゴにバッグを乗せる。明日の朝は六時半集合だ。カードの箱は事務所に残る。

門を出た。

疲れた。

ハンドルを握る。制服のシャツはバッグに畳んである。名札はケースの中だ。

金曜の便は金曜に持つ。

ペダルを踏んだ。拠点のシャッターが、背中のほうで一段落ちる音がした。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 配達員は通いの届け先で猫の獣人に種を注がれて帰る

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・9・3

レーティング R18